

平成31年度 ともの家 事業報告

1. はじめに

31年目の春。新しい仲間を迎えた入社式は、「かっぼれフラメンコ」のダンスで賑やかにスタートしました。暮らしの場（グループホーム）も含めて39名の大所帯です。職員体制に大きな変化はなかったため、支援内容の継続に加え、より細部への気づきと、豊かな想像力をもって仲間の内面に寄り添ってきました。発信したひと言や瞬間の表情、それを見逃さない能力を身につけることは容易ではありません。それでも、その努力の成果は信頼という形で、積み重なってきていると実感しています。

成人期から高齢期までの、人生の大半を過ごす場としての課題が現れた年でもありました。50歳を超えた仲間の衰えが顕著に表れ始め、障がい者のグループホームでは支援が難しい仲間が出てきました。障がい者の制度では、複数支援体制が取れるだけの財政基盤がないことが1番の問題です。そして、医者に勧められる住まいの場所は、療養型老人病院のみというお粗末な状態でした。認知症を迎えた仲間は、現在「あすなろの家」のショートステイ利用で新たな生活を組み立てているところです。人生の終焉まで、仲間たちのライフストーリーが深みのある、豊かなものであるように、関わり続けられる「ともの家」でありたいと、事業を拓げてきましたが、理想と現実のギャップを突き付けられた1年でした。

2.

I. 地域発信

一番身近な船越地区では、船越まつりへの参加と、地域生活支援活動「ひだまりはうす」へのお菓子やパンの提供。また、お店で行う年2回のマルシェでも、地域にお住いの多くのお客様に楽しんで頂くことが出来ました。

広くは、“障がい”にスポットを当てた映画を2本上映しました。無料映画会といいこともあり、総勢230名の方が足を運んで下さり、笑いと涙だけでなく、障がいがあっても、普通に暮らすことが大切であり、出来るんだということを、映像を通して感じてもらえたと思っています。

II. 職員育成

最低1回は外部研修に出て、学習はもちろんですが、外部の情報や空気感を体感していきました。成果は研修報告会で発表しました。

昨年からはじめたこの報告会は、法人理事や保護者にも参加して頂くことで、緊張感が増します。また、相手に伝わるように話すためには、自らの深い理解が必要になるため、自身の成長に繋がるとしています。

個別の強化については、談話室に書籍やDVDを用意し、自己啓発に利用してもらっています。残念ながら使用している職員はごくわずかです。

Ⅲ.災害対策

初動訓練の報告は別紙

各職員の現状を把握するため、個人達成目標リストを作成しました。

防災はどうしても後回しになりがちな事業で、作成はしたものの、動き出しが遅く、2月下旬になって慌てて行動に起こしました。

事業継続に関しては、シュミレーションチェックに留まりました。

Ⅳ.その他

1. 仲間たちの支援のネットワークをつくる

○生活の要だった弟が夏に急死し、認知症の母親と本人の生活の組み立て直しを、行いました。あくまでも「本人の意思を第一すること」そんな当たり前のことを、計画相談事業所の相談員や別居の家族に理解してもらうことが難儀でしたが、どちらかといえば、ネットワークのパイプ役として参加しました。

○障がい者総合支援法の制度を使いながら、日中作業とホームでの暮らしを培ってきた仲間の高齢化に伴い、スムーズに介護保険制度に移行するための方法を、計画相談事業所の相談員と模索してきました。なるべく相談員を巻き込み、相互に理解を深めてきました。本人の意思が確認できず、親族である弟も三重県在住ということで、親族でなければ手続きが出来ない書類の提出は、手間取りながら進めてきました。

後見人がついていれば事がスムーズに運んだのかもしれないと思いつつも、入院時の付き添いや医師の説明など、たとえ後見人がいても解決できないことが多いことも学びました。

2. ホームの体制強化については、次年度への課題になりました。